

8. What are the benefits through Codex participation supported by Codex Trust Funds?

Adoption of Codex standard in your National food safety regulations

9 Do you have any specific policies regarding the adoption (introduction) of Codex Standards, Guidelines and any other texts into your national Food Safety laws and regulations,

10. Are there any differences between Codex standards and your national standards? If yes, please specify some of the difference, and explain why the Codex and national standards are difference, and how are you going to harmonize the standards?

Formulation of the Codex Standards

11. How is your country Codex position formulated?

12. How are comments from your stakeholders considered in the process of formulating Codex National position?

13. How does your national Codex Contact point communicate with relevant national governments, agencies, and other stakeholders?

14. Do you have the national Codex Committee?

- If yes, who are the members of the Committee, what are the Term of Reference? How often the National Codex Committee meeting is held?

15. Do you have national Codex website?

- Yes
- No
- If yes, How does your national Codex Office utilize Website for the Codex related activities?

16. What are the weak points within your national codex system?

Codex Review

17. Are you happy with the recommendations from Codex review?

- Yes, why

- No, why

18. Are you happy with improvements achieved so far by the Codex after the Codex review?

- Yes, why
- No, why

19. Please list up top 5 biggest problems which Codex faces? And Why do you think so, and any suggestions to overcome these problems?

-
-
-
-
-

Training

20. Do you know the FAO/WHO Codex training manual?

- Yes
- No

21. Have you used the FAO/WHO Codex training manual?

- Yes
- NO

22. Do you recognize the needs of Training in Codex?

- Yes, if yes, how do you conduct Codex Training in your country?
- No,

Codex and Science

23. Do you think Codex standards, recommendation are based on sound science?

- Yes, why
- No. why

24. Do you think data from developing countries are utilized in the FAO/WHO risk assessment process?

- Yes, why
- No, if not, do you think how the wider utilization of data from developing countries could be

achieved?

25. From your country point of view, do you think the application of sound science and risk assessment in Codex standard setting is enough?

- Yes, why
- NO, why

Thank you for taking your time.

平成18年度厚生労働科学研究費補助金（食品の安心・安全確保推進研究事業）

「食品安全施策等に関する国際協調のあり方に関する研究」

分担研究報告書

国際規格採用過程における各国の対応と国際協調に関する研究

その2 Codex に対する取り組み等に関する食品企業等に対する意向調査

分担研究者 豊福 肇 国立医薬品食品衛生研究所安全情報部主任研究官
研究協力者 食品品質保持技術研究会

研究要旨：我が国の今後の Codex 政策及び戦略の構築に資するため、食品品質保持技術研究会の協力により、同研究会の会員に対し、Codex への要望、入手したい情報、我が国の Codex 戦略へ望むこと、Codex 連絡協議会のあり方等についてアンケートにより調査したところ、41 機関から回答があった。Codex 規格が我が国の食品業界に役立つという意見は多数を占め、Codex 規格が世界規格となり調和が図られることを望む声及び我が国の規格を Codex 規格へそろえることを望む声がある一方、一般の人へのわかりやすさ、PR 不足、国益を損なわない戦術の必要性が明らかになった。

ステークホルダーからの input の増加につながり、Codex の各部会の活動状況がわかりやすいように日本語での情報の開示、我が国の行政の人事異動システムの弱点を補うシステムの構築及びそれを利用した Codex 戦略を確立し、さらに我が国の規格と Codex 規格の調和に向けての作業を急ぐことが今後の課題として考えられた。

A. 研究目的

わが国の Codex への今後の参画のあり方 Codex 活動戦略の検討の基礎資料を得るために、食品品質保持研究会の協力により、我が国の食品業界等の Codex 活動に関する認識を調査した。

B. 研究方法

平成19年1月に食品品質保持研究会の加盟機関170機関に対しアンケート（別添

1）を配布し、回答を依頼した。

C. 研究結果 ならびに D. 考察

回答があったのは41機関であった。その内訳は製造業（飲料、乳・乳製品、食肉・食肉製品、水産食品、瓶詰・缶詰、健康・栄養食品、添加物、弁当・そうざい、容器包装）が34、流通業、保管業が1、小売業（スーパー、コンビニ）が1、飲食店が1、原材料の輸入、生産→4、その他（技術指導、食品技

術コンサルタント、マスコミ、独立法人研究所) が7であった。

質問と回答の概要は次の通りであった。

1. Codex の機関、その運営及び制度に何を望むか

- ・ 世界で同じ規格が使えるようになってほしい
- ・ 急激な規格、基準設定等の変更をしないしてほしい
- ・ 安全、安心な食品規格
- ・ もう少し一般の人に理解しやすいPRをするべき
- ・ 情報の公開
- ・ 特定地域に有利な採択をしないでほしい
- ・ 日本の行政は、業界の意見を集約して、国益を損なうことのないよう Codex の委員会で発言をしてほしい
- ・ 分かりやすい説明方法で、消費者も積極的に参加できるような内容、雰囲気作り
- ・ 輸出入品の規格の違いによるトラブルをなくすべく統一規格を
- ・ そもそもよく知らない

2. Codex 規格等は日本の食品業界にとって役に立つと思うか

Yes→34

- ・ 世界共通基準として
- ・ 安心、安全意識の確立
- ・ 国内産業の適切な保護が可能
- ・ 輸出入時の自社規格に反映できるから

- ・ 政府ベースでの国際的規格であるから
- ・ 輸出入品を取り扱うには必要であると思う
- ・ 充分検討されたものであるので、国内での基準がない場合の参考、拠り所となる

No→3

- ・ 日本と違うところがある

無回答→5

- ・ (Yes、No に両方に丸をつけた者 1名)

3. 国内、輸出入先の規制と Codex の規格が異なることにより問題が生じたことはあるか

Yes→3

- ・ 海外で一般的に使用され、安全性評価も済んでいる添加物が日本で認可されておらず、混入しており自主回収した
- ・ 基準を主とする規制の統一を望みます

No→33

無回答→5

4. そのほかに Codex 規格等に関連して、問題が生じたことがあるか

Yes→1

No→34

無回答→6

5. Codex 規格等を日本の食品業界はどのように活用すべきか

- ・ 業界よりも国に活用すべき

- ・ 輸出入時の基準としてや社内ルール作成時に参考にすべき
- ・ 輸出入の場合 Codex 規格に適合した食品を取り扱う
- ・ 日本の食文化を壊さない範囲内の活用
- ・ 役所が世界標準に合わせた規格・試験方法を採用し、他国と異なるものを採用しないように心がけるべき
- ・ 食衛法等の規格を Codex 規格と合わせるような、速やかな対応
- ・ 自主的管理法導入の参考にすべき
- ・ 各国の規格の違いに対して、統一目標として

6. Codex 規格、Codex 勧告、指針等に望むことは

- ・ 各国の食文化の尊重
- ・ 日本の主張が反映されたものであってほしい
- ・ わかりやすい英語で書いてほしい
- ・ 政治的な色が強い
- ・ 現実的であること
- ・ 世界基準として優先性を発揮できる仕組みであってほしい
- ・ 普及法に力を入れるべき
- ・ 世界統一規格の実現

7. どんな Codex 関連情報が欲しいか

- ・ 日本の対処方針
- ・ 安全性データ
- ・ 決定、合意事項
- ・ 議論の経緯
- ・ 食品輸出入時の検査情報
- ・ 汚染物質関連
- ・ どんな規格が検討されているのか

- ・ 現在の議論の進み具合の詳略等の情報を迅速に知りたい
- ・ 現在は、食品添加物、農薬等を中心に、アレルギーや遺伝子組み換えなど
- ・

8. どのように Codex 関連情報を入手しているか

①Codex の website から→13

②国内の業界団体の情報誌等から→18

- ・ JAFAN
- ・ JIDF
- ・ 食品衛生学雑誌
- ・ 農水、厚生労働省の HP
- ・ 日本食品添加物協会
- ・ 月刊「HACCP」

③海外、国際的な業界団体の情報誌等から→1

④Codex 連絡協議会を通して→2

⑤その他→6

関連セミナー

グループ会社

官庁のホームページ

⑥無回答→8

9. Codex 規格等の策定作業において、行政側にコメント、要望等を伝えたことはあるか

Yes→5

No→32

無回答→4

10. 9でYesの場合、具体的にどのようなコメント、要望を伝えたのか

- ・ 担当がころころ変わっていないか心配
- ・ 戦略を持って日本の利益になるよう取り組むべき
- ・ 安全性確保に関するものについては、発展途上国に妥協すべきでない

11. 9でNoの場合、その理由は

①Codex 規格等が企業の利益にもたらす悪影響、不利益等が認められないから→11

②Codex 関連活動につき込むリソースがないから→13

③そもそも Codex の存在、規格等をあまり知らないから→14

④その他→3

- ・ 担当者でないから
- ・ メーカーではないので Codex に直接関係ない
- ・ 添加物協会として対応しているため

⑤無回答→9

12. 日本の行政に対して、どのような Codex 戦略を望むか、足りないものは何だと思いか

- ・ 施行されるまでの期間にゆとりがあること
- ・ 日本の食文化は守るという基本
- ・ Codex 規格策定に国としてもっと積極的に参加すること
- ・ 同じ担当官に続けて担当してほしい（3年に一度新任が着任するので、基礎知識を得るための時間がか

かりすぎ、戦略にまで至らない）

- ・ 規格のハーモニゼーションを早急に進めてほしい
- ・ 世界の常識に合わせてほしい
- ・ 日本の考え方を反映させると同時に、反映されない部分は、国内の基準から外すべき（ココアの粉末清涼飲料規格など）
- ・ より企業戦略的観点に立って提案型で対応すべき
- ・ 日本の基準規格を提示するだけでなく、逆に国の規格の見直しも必要

13. 行政と国民や業界とのコミュニケーションの場として、Codex 連絡協議会が存在することを知っているか

回答者のほぼ半数が存在は知っていた。

Yes→19

No→18

無回答→4

14. 13でYesの場合、出席したことはあるか、またその理由は

Yes→4

- ・ 情報収集のため
- ・ Codex の動向を知るため

No→17

- ・ 具体的な案がないので

無回答→20

15. 13でYesの場合、その制度、会議の内容、進め方等についてどう思うか、改善すべき点等はあるか

- ・ 業界代表の人選がベストなものになっているか、どのような基準で選

ばれているか疑念がある(意見を聞いたというポーズにすぎないのでは)

- ・ 実質的な意見聴取の場になってない(人数が多すぎ、十分に発言できない)

E. 結論

食品業界から Codex について、よくわからないという声が聞かれ、もっと一般の人や食品企業にもわかりやすくすべく PR が必要であるとの意見もあった。また回答のあった機関のうち約 1/3 は Codex 関連活動につき込む人的資源がないことが明らかになった。また 1/3 強がそもそも Codex の存在、規格等をあまり知らないということが判明した。

国内、輸出入先の規制と Codex の規格が異なることにより問題が生じたことはあるとの回答が 3 件あり、添加物等で我が国と Codex 規格との相違が浮彫にされた。

Codex 関連情報として欲しいものとして列挙されたもののうち、“日本の対処方針”及び“部会での決定及び合意事項”の一部は Codex 連絡協議会の資料として日本語で website に公開されているが、このようなコメントがあることから、Codex 連絡協議会の資料の開示の仕方に問題があると考えられた。ほかに関連情報の要望があった“議論の経緯”、“決定及び合意事項”、“どんな規格が検討されているか”、“議論の進み具合”といった内容は Codex 公式 website から、どの部会で議論されているかさえ知っていれば、英文の報告書を入手することで知ることは可能であるが、日本語の解説はないため、このような日本語版の資料が望まれ

ていることが明らかになった。

Codex 規格等の策定作業において、行政側にコメント、要望等を伝えたことはあると回答した機関は 5 機関あり、その内容としては“担当がころころ変わっていないか心配”、“策略を持って日本の利益になるよう取り組むべき”、“安全性確保に関するものについては、発展途上国に妥協すべきでない”と厳しい内容であった。

日本政府に望むこととして、Codex 規格策定に国としてもっと積極的に参加すること、日本の規格と Codex 規格とのハーモナイゼーションを急ぐべき(我が国の規格見直しを含む)との意見があった。

Codex 連絡協議会については、その存在は知っているとの回答がほぼ半数を占めたが、出席したと応えた者は約 10%であった。また、傍聴のみで、ステークホルダーからの実質的な意見聴取の場になっていないとの意見があった。

ステークホルダーからの input の増加につながり、Codex の各部会の活動状況がわかりやすいように日本語での情報の開示、我が国の行政の人事異動システムの弱点を補えるシステムの構築及びそれを利用した Codex 戦略の確立、並びに我が国の規格と Codex 規格の調和に向けての作業を急ぐことが今後の課題として考えられた。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

①豊福 肇、窪田邦宏、森川馨、諸外国の

Codex 活動における透明かつ積極的なステークホルダーの関与を促進するための Internet 活用の動向、国立医薬品食品衛生研究所報告第 124 号(2006), 30-37

②豊福 肇 FAO/WHO 合同食品規格計画 第 28 回魚類・水産製品部会概要報告 食品衛生研究 (2007)Vol.57 in press

2. 学会発表

①豊福肇、コーデックス委員会及び世界の動向
国立保健医療科学院 平成 18 年度特別課程食肉衛生検査コース
2006 年 6 月

②豊福 肇

コーデックス及び世界の動向
国立保健医療科学院 平成 18 年度特別課程食品衛生管理コース
2007 年 1 月

③豊福肇、第 38 回食品衛生部会
平成 18 年度コーデックス委員会活動報告会 2007 年 3 月

H. 知的財産権の出願・登録状況
特になし

別添 1

Codex に関するアンケート

業種

該当するものにすべて○で囲んでください。

1. 製造業；飲料、乳・乳製品、食肉・食肉製品、水産食品、瓶詰・缶詰、健康・栄養食品、添加物、弁当・そうざい、容器包装、その他（ ）、
2. 流通業、保管業
3. 小売り業（スーパー、コンビニ）
4. 飲食店、
5. 原材料の輸入、生産
6. その他

1. Codex の機関、その運営及び制度に何を望みますか？

2. Codex 規格等（Codex の各種基準値、衛生規範、指針等すべての Codex 文書を含む、以下同じ）は日本の食品業界にとって役にたつと思いますか

Yes （その理由は？）

No （その理由は？）

3. 国内規制と輸出入先の規制と、コーデックスの規格全てが異なることにより問題が生じたことがありますか、【Yes/No】

【Yes】とお答えの方、その際、どのように対処しましたか、また、どのように対処したかったですか？

4. そのほかに Codex 規格等に関連して、問題が生じたことがあるか？【Yes/No】

【Yes】とお答えの方、その際、どのように対処しましたか、また、どのように対処したかったですか？

5. Codex 規格等を日本の食品業界はどう活用すべきですか？

6. Codex 規格、Codex の勧告、指針等に望むことは何ですか？

7. どんな Codex 関連情報が欲しいですか？

8. 通常、どのように Codex 関連情報を入手していますか？

1)Codex の website から

2)国内の業界団体の情報誌等から（その場合は具体的な雑誌名等）

3)海外、国際的な業界団体の情報誌等から（その場合は具体的な雑誌名等）

4)Codex 連絡協議会を通して

5)その他（具体的に）

9. 特定の Codex 規格等の策定作業において、行政側にコメント、要望等を伝えたことはありますか？

1)Yes

2)NO

10. 9で【Yes】の場合、具体的にどのような事案について、どのような理由から、どのようなコメント、要望等を伝えましたか？

11. 9で【No】の場合、その理由でつぎのなかで当てはまるものをご回答ください。

- 1)Codex 規格等が企業の利益にもたらす悪影響、不利益等が認められないから
- 2)Codex 関連活動につぎ込むリソース(人材的にも、財政的にも)が無いから
- 3)そもそも Codex の存在、規格等をあまり知らないから
- 4)その他 (具体的に)

1 2. 日本の行政に対して、どのようなコーデックス戦略を望みますか、足りないものは何だと思
いますか？

1 3. 行政と国民や業界とのコミュニケーションの場として、コーデックス連絡会議が存
在することを知っていますか？

【Yes/No】

14 13で【Yes】の場合、出席したことがありますか？

Yes (その理由?)

No (その理由?)

15 13で【Yes】の場合、その制度、会議の内容、行い方等についてどう思うか？改善すべ
き点等ありますか？

以上

ご協力ありがとうございました

平成18年度厚生労働科学研究費補助金（食品の安心・安全確保推進研究事業）

「食品安全施策等に関する国際協調のあり方に関する研究」

分担研究報告書

国際規格採用過程における各国の対応と国際協調に関する研究

その3 Codex トレーニングマテリアルを用いたトレーニングの試行

分担研究者 豊福 肇 国立医薬品食品衛生研究所安全情報部主任研究官

研究要旨：平成18年11月17日に厚生労働省、農林水産省、食品安全委員会から参加した10人を対象にFAO/WHOが作成したトレーニングパッケージの英文テキスト、添付されているpower pointのスライドを用い、4時間で全モジュールを通して講義し、それに対するコメントを求めた。コース全体の印象は“大変素晴らしい”または“素晴らしい”であった。また受講者全員がコースの内容はコースの目的にあっていと回答した。このようなトレーニングのニーズは受講者全員が認識した。全体的な印象としては、このトレーニングパッケージはよくできているという印象が多かった。Codex関連作業及びCodexの部会等に参加する職員に広く受講させるには、もうすこし内容をコンパクトにする必要性が指摘された。

A. 研究目的

Codexの総会、部会等に十分に参加し、参加したことを最大限生かすようにするためには、加盟国はどのようにCodexが組織され、機能し、またFAO/WHOからの科学的アドバイスを得ているか等について、十分な知識が必要である。さらに強固な国内のCodexプロセスを促進するための国内Codex活動体制が必要である。そのためにFAO/WHOはCodexトレーニングパッケージを作成した。また、今年度の研究で行った途上国へのアンケート調査において、Codexのトレーニングの重要性が指摘された。

以上のようなことから、この研究ではFAO/WHOのトレーニングパッケージが我が国においても有効であるかを厚生労働省、農林水産省、食品安全委員会から参加した10名を対象に試行し、受講者を対象としたアンケート調査により、今後の本パッケージの活用に関する基礎資料を得るために、認識を調査した。

B. 研究方法

平成18年11月17日に厚生労働省、農林水産省、食品安全委員会から参加した10人を対象にFAO/WHOが作成したトレーニングパッケージの英文テキスト、添付され

ている power point のスライドを用い、4 時間で全モジュールを通して講義し、添付されていた評価シートを用いてコメントを求めた。

C. 研究結果 ならびに D. 考察

コース全体の印象は“大変すばらしい”または“すばらしい”であった。また受講者全員がコースの内容はコースの目的にあっていると回答した。各モジュールとも情報は十分との回答がほとんどであった。

このようなトレーニングのニーズは受講者全員が認識した。全体的な印象としては、このトレーニングパッケージはよくできているという印象が多かった。

スライドについては良いという意見があった反面、文字が多いのでイラスト、表を増やした方がいいという意見もあった。

量としては Codex に関連する業務が主たる業務である厚生労働省の食品安全部国際食品室に新規配属になった職員には最適であるが、その他の食品安全担当部局で Codex の部会等に参加する者が受講しやすくするためには、非常にわかりやすいが半日でやるには量が多く、もうちょっと量を減らすと、受講しやすいのではないかというコメントもあった。

代表団のメンバーの選出に関するモジュールを我が国でも適用すべきではないかという意見があった。

また、このトレーニングパッケージの内容に含まれていないが、実際の Codex の部会等では重要な点として、Coffee break 等非公式な場面における意見交換、加盟国間での根回し、意見調整等に関するモジュールがないことが指摘され、我が国のトレ

ニングにおいては、こういった内容も含むべきとの意見があった。

E. 結論

我が国の Codex 関連作業を行う職員及ぶ Codex の部会等に参加するすべての職員に対し、FAO/WHO のトレーニングパッケージにある内容をやや精査し、コンパクトにしたトレーニングを行うベネフィットが認められた。さらに Codex 関連作業を主たる業務とする職員に対しては、本トレーニングパッケージにあるそのままの内容の講習を受講するベネフィットが認められた。

このようなコメントを受け、本研究の一部として、このトレーニングパッケージを翻訳することとした。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

①豊福 肇、窪田邦宏、森川馨、諸外国の Codex 活動における透明かつ積極的なステークホルダーの関与を促進するための Internet 活用の動向、国立医薬品食品衛生研究所報告第 124 号(2006), 30-37

②豊福 肇 FAO/WHO 合同食品規格計画 第 28 回魚類・水産製品部会概要報告 食品衛生研究 (2007)Vol.57 in press

2. 学会発表

①豊福肇、コーデックス委員会及び世界の動向

国立保健医療科学院 平成 18 年度特別課程
食肉衛生検査コース
2006 年 6 月

③豊福肇、第 38 回食品衛生部会
平成 18 年度コーデックス委員会活動報告
会 2007 年 3 月

②豊福 肇
コーデックス及び世界の動向
国立保健医療科学院 平成 18 年度特別課程
食品衛生管理コース
2007 年 1 月

H. 知的財産権の出願・登録状況
特になし

平成18年度厚生労働科学研究費補助金（食品の安心・安全確保推進研究事業）

「食品安全施策等に関する国際協調のあり方に関する研究」

分担研究報告書

国際規格採用過程における各国の対応と国際協調に関する研究

その4 WHOの国際的なトレーニングにおける国際協調の可能性に関する調査研究

分担研究者 豊福 肇 国立医薬品食品衛生研究所安全情報部主任研究官
協力研究者 窪田邦宏 国立医薬品食品衛生研究所安全情報部研究員

研究要旨：食品安全施策等に関する国際協調のあり方の一つとして、世界保健機構（WHO）が食品安全分野で行っている Capacity Building のうち、2000年から始まった Global Salm-Surv（以下「GSS」という。）の国際トレーニングコースに焦点を絞り、このような多数の国による国際協力事業における我が国の国際協調のあり方について調査研究した。今回調査した GSS の Advanced workshop は参加したアジアの国々の弱点である食品由来疾患のサーベイランスを強化する上で、非常に的を射たコースであると考えられた。このようにすでに枠組みが確立しているプロジェクト、特にアジア地域で行われる国際トレーニングに我が国が参画することで、我が国単独で支援事業を行うより、アジアに共通する食品由来疾患に関するデータを収集し、リスクが認められればそのリスク管理を Codex の枠組みで行うことができるのではないかと考えられた。

A. 研究目的

食品安全施策等に関する国際協調の1分野として、世界保健機構（WHO）が食品安全分野で行っている Capacity Building のうち、2000年から始まった Global Salm-Surv（以下「GSS」という。）の国際トレーニングコースに焦点を絞り、このような多数の国による国際協力事業における我が国の国際協調のあり方について、調査研究した。

B. 研究方法

まず GSS の概要について、WHO Global Salm-Surv Progress report で調査した。さらに実際に平成19年1月15-20日に行われた WHO Global Salm-Surv Advanced Workshop in Asia に参加し、その実態を調査するとともに、今後このようなマルチで行われている事業へ我が国がどのように貢献できるかを調査した。

C. 研究結果 ならびに D. 考察

GSS とは食品由来胃腸炎疾患を検出し、

対応し、さらに予防するため、各国の保健省及びリファレンスラボの **Capacity** を強化することに熱心な研究所及び個人のネットワークである。

GSS は統合した、検査室ベースのサーベイランス及びアウトブレイクの検出と対応を普及させ、ヒトの健康、獣医師及び食品という異なるバックグラウンドの微生物学者、疫学者の間のコミュニケーション及びセクションをまたいだ協力を促進するという目的がある。

GSS の執行委員会のメンバーは WHO、パスツール研究所、アメリカ CDC、オランダワゲニンゲン大学動物科学グループ、カナダ公衆衛生局、オーストラリア OZfoodnet、デンマーク国立食品研究所、アメリカ FDA 動物用医薬品局で、これらの機関が主な外部拠出金のドナーである。2004 年の GSS の予算は約 170 万ドルで、これは 2000 年の 54 万ドルからおよそ 3 倍に増額になり、その結果、年間開催される国際トレーニングコースの回数も年 2 回から 2005 年には年 6 回に増えた。

GSS の主な活動は、国際トレーニングコースの開催、外部精度管理、焦点を絞った地域及び国内プロジェクト、電子メールによる Discussion group、カントリーリーダーベースの維持管理である。

国際トレーニングコースはレベル 1、2（微生物と疫学が別々に開催される）、レベル 3（微生物と疫学が同時に行われる）から、さらには今回私が実際に参加して調査した advanced workshop（微生物と疫学が同時に行われる）の 4 つのレベルがある。通常、10(6-17)カ国が参加し、コースは 5-6 日開催される。

2005 年までに 33 の国際トレーニングが開催され、90 カ国から 600 名以上の微生物学者と疫学者がトレーニングを受けた。アジアのトレーニングはタイのバンコクで行われたコースは別紙 1 のとおりであった。

（ただし、中国のみは中国 CDC が独自に GSS のコースを開催している。）

今回の Advanced workshop の講師陣はアメリカ(5)、オーストラリア(3)、タイ(1)、香港(1)、デンマーク(2)、WHO 西太平洋事務局(1)、FAO コントラクト専門家(1)及び日本(私 1 名)の計 15 名で、参加者はタイ(14)、中国(6)、シンガポール(5)、カンボジア(5)、マレーシア(4)、フィリピン(4)、ベトナム(4)、ラオス(3)、韓国(3)、スリランカ(3)、ネパール(2)、インドネシア(2)、インド(1)、日本(1；国立感染症研究所)の合計 57 名であった。基本的には各国から微生物検査担当者 1、疫学専門家 1、FETP 1 の 3 名が招待されていた。なお、この workshop の目的は 1) アジアの公衆衛生研究機関の **Capacity** の強化、2) 食品由来疾患に関する有益な情報を普及させるとともに、地域のコミュニケーションを促進する、3) 公衆衛生政策に影響を与えるため食品由来疾患と食品中の病原体のデータの統合を促進するためであった。

カリキュラムは別添 2 のとおりであった。コースのメインテーマとしては 1) 検査室ベースのサーベイランス、2) ヒトの食品由来疾患と食品または食肉生産動物由来の病原体データを統合し、ファージ型別、血清型別の手法を用いた食品由来疾患の原因追及、3) 食品由来アウトブレイクの調査、4) 食品由来疾患の集計と報告書の作成、並びに 5)

検査室データに基づく食品由来疾患の実被害の推定であった。

全体的な印象として、この **Advanced workshop** は今回参加したアジアの国々の弱点である食品由来疾患のサーベイランスを強化する上で、非常に的を射たコースであると考えられた。内容的にはかなり高度である。また講義で学んだことを実際の事例を用いて議論しながら実践することで理解が深まると考えられた。また、過去のトレーニングで学んだことに基づき、各国が実践している調査の報告から、トレーニングにより研究者及び研究機関間のネットワークが構築され、経験や知識に乏しい途上国の機関がトレーニングで学んだことを活用し、見事な調査研究を行っていることがうかがえた。

我が国の食品由来疾患（食中毒）の調査を比較すると、上記メインテーマうち、1)の検査室ベースのサーベイランスは我が国でも行われているが、2)ヒトの食品由来疾患と食品または食肉生産動物由来の病原体データを統合し血清型別及びフェージ型別を用いて食品由来疾患の原因究明を行うことは全く行われていない。また 3)の食品由来アウトブレイクの調査も我が国のような患者及び残品または原因施設の環境検体からの微生物検査に重きをおいた調査ではなく、疫学的な手法（症例対照研究または後ろ向きコホート研究）と患者及び残品または原因施設の環境検体からの微生物検査を組み合わせたもので、我が国の調査手法とかなりの違いが認められた。5)検査室データに基づく食品由来疾患の実被害の推定については、我が国では予備的な調査研究が行われ始めたばかりで、CDC等この分野

の経験が豊かな機関からの情報は非常に有意義であった。

E. 結論

国際的な食品安全に効果的に貢献するという視点で見た場合、我が国の拠出金単独で、これだけの効果を生むのは難しいのではないかを感じた。それよりも、この GSS のように、すでに枠組みが確立しているプロジェクトに投資する、執行委員会のメンバーとして参加する、あるいは講師派遣による *in-kind*（現物出資）が、我が国単独で援助プロジェクトを行うよりも効果的と考えられた。特に、アジア地域で行われるトレーニングに積極的に参加してアジア地域の食品由来疾患サーベイランスを強化することにより、アジア共通の食品由来疾患や食品中のハザードに関するデータが多く収集され、アジア地域における食品安全上の問題が特定されれば、Codex のアジア調整部会または食品衛生部会で、そのリスク管理を共同で取り組むことができると考えられた。

さらに、このような世界規模でのトレーニングコースに参加することにより、国際的な食品由来疾患のサーベイランスに関する情報、特に食品由来アウトブレイクの調査法、ヒト、動物及び食品を統合した血清型別及びフェージ型別を用いたデータ解析並びに食品由来疾患の実被害の推計といった分野の最新情報を入手し、また講師陣を派遣している各国政府のサーベイランス機関とのネットワークの構築、情報交換、データ交換等を行うことは非常に有意義であると考えられた。

F. 健康危険情報

特になし

2006年6月

G. 研究発表

1. 論文発表

①豊福 肇、窪田邦宏、森川馨、諸外国の Codex 活動における透明かつ積極的なステークホルダーの関与を促進するための Internet 活用の動向、国立医薬品食品衛生研究所報告第 124 号(2006), 30-37

②豊福 肇 FAO/WHO 合同食品規格計画 第 28 回魚類・水産製品部会概要報告 食品衛生研究 (2007)Vol.57 in press

2. 学会発表

①豊福肇、コーデックス委員会及び世界の動向
国立保健医療科学院 平成 18 年度特別課程食肉衛生検査コース

②豊福 肇

コーデックス及び世界の動向

国立保健医療科学院 平成 18 年度特別課程食品衛生管理コース

2007年1月

③豊福肇、第 38 回食品衛生部会

平成 18 年度コーデックス委員会活動報告会 2007年3月

H. 知的財産権の出願・登録状況

特になし

別表 1 ; バンコクで過去に開催された国際トレーニングコース

Level-1 training course: 22-27 November 1999, Bangkok, タイ –参加者 25 人 参加国:カンボジア, 中国, インド, インドネシア, ラオス, マレーシア, 韓国, タイ, ベトナム

Level-1 training course: January 2001, Bangkok, タイ – 参加者 22 人:参加国:インドネシア, ラオス, Myanmar, ネパール, パプア・ニューギニア, フィリピン, 韓国, スリランカ, タイ, ベトナム

Level-2 training course: January 2001, Bangkok, タイ –参加者 19 人、参加国: カンボジア, 中国, インドネシア, ラオス, マレーシア, ネパール, フィリピン, タイ, ベトナム

Level-3 training course: 18 January-2 February 2002, Bangkok, タイ –参加者 53 人、参加国:カンボジア, 中国, インドネシア, 韓国, ラオス, マレーシア, ネパール, パプア・ニューギニア, フィリピン, シンガポール, スリランカ, タイ, ベトナム

Level-4 training course: 25-30 August 2003, Bangkok, タイ – 参加者 29 人、参加国:カンボジア, インド, インドネシア, 韓国, ラオス, マレーシア, ネパール, パプア・ニューギニア, フィリピン, スリランカ, タイ and ベトナム.